目　次

1　はじめのうた
2　季節のカード（草木編）
3　童　　謡　　背くらべ
4　早口ことば　　雨ガッパが番ガッパ
5　今月の詩　　螢の出盛り　　北原白秋
6　た し 算　　２の段
7　ことわざ　　壁に耳あり障子に目あり　果報は寝て待て
　　聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥
　　聞いて極楽見て地獄　窮すれば通ず
8　か け 算　　３の段
9　俳　　句　　小林一茶　松尾芭蕉　上島鬼貫
10　かぞえうた　　２頭　４頭　６頭　　（パンダ）
11　なぞなぞ
12　手あそびうた　なべなべそこぬけ
13　今月のうた　　国風文化
14　四字熟語　　一喜一憂　　温故知新　　言語道断
15　イメージトレーニング　　クロス君（第２話　おおむかし）
　　（イメージしてみましょう）
16　おはなし　　こびとと靴屋
17　漢　　詩　　春夜　雨を喜ぶ
18　百人一首　　参議 篁　俊恵法師　持統天皇　喜撰法師
19　復習コーナー
20　暗　　示　　（静かなところで目を閉じて聞きましょう）

早口ことば

雨(あま)ガッパが番(ばん)ガッパ

螢の出盛り

北原白秋

螢の出盛り　苺どき
昼間も病犬吠え立てる

螢の出盛り　苺どき
川辺の小母さまどうしてぞ

螢の出盛り　苺どき
今年も遊びにゆきましょか

螢の出盛り　苺どき
鮎つり、蟹つり、日が暮れて

螢の出盛り　苺どき
いつかもお舟で帰された

ことわざ

壁に耳あり障子に目あり

どこでだれが聞いているか、また見ているかわからない。

果報は寝て待て

幸運は人の力ではどうすることもできないから、あせらず気長に待とう。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

人に聞くのが恥ずかしいからと、知らないままですごしてしまうと、一生知らないことのほうが恥ずかしい。

聞いて極楽見て地獄

聞くのと実際に経験するのとでは、大きな違いがあること。

窮すれば通ず

行きづまって困ると、かえって良い案が見つかるものである。

俳　句

雀の子　そこのけそこのけ　御馬が通る

小林一茶

山路きて　何やらゆかし　すみれ草

松尾芭蕉

春の水　ところどころに　見ゆるかな

上島鬼貫

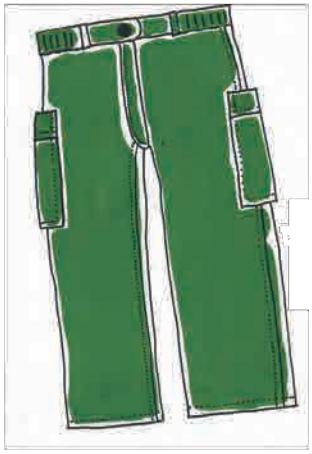
なぞなぞ

1　入り口は一つだけど、出口がないものなあに？

2　入り口一つに、出口が二つあるものなあに？

3　入り口一つ。出口も一つのものなあに？

4　入り口は一つ。でも、先へ行くと五本のわかれ道になるものなあに？



《なべなべそこぬけ》

① なべなべ　そこぬけ　そこがぬけたら

手をつなぎながら ゆらす

② かえりましょう

手をつないだまま
ひっくりかえる

今月のうた

《国風文化》

(平安時代のなかごろに
菅原道真の意見により　遣唐使が廃止された
その後　唐の影響をうけることが少なくなり
日本風の文化 国風文化が生まれた)

ひらがな発明　和歌がさかん
有名なのは　六歌仙
在原業平　小野小町　僧正遍昭
喜撰法師　大伴黒主　文屋康秀
その後 紀貫之まとめた　古今和歌集

物語や　随筆日記など
紫 式部の 源氏物語　清少納言の 枕草子
竹取物語や　伊勢物語　蜻蛉日記に　更級日記
たくさん　たくさん
すぐれた作品　生まれたよ

いっき いちゆう
一喜一憂

喜(よろこ)んだり心配(しんぱい)したりすること。

おんこ ちしん
温故知新

古(ふる)いものを調(しら)べて新(あたら)しい知識(ちしき)を発見(はっけん)すること。

ごんごどうだん
言語道断

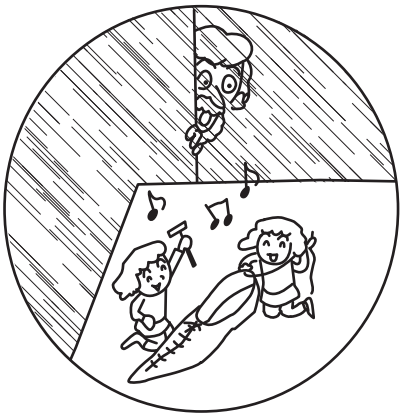
とんでもないこと。

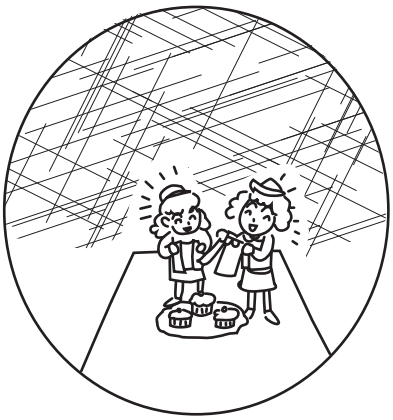
おはなし

こびとと靴屋

「こびとと靴屋」は、貧しいけれど心のやさしいおじいさんと二人のこびとのお話です。お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

1　おじいさんの仕事は、何屋さんですか。
2　切っておいた皮は、次の日には、どうなっていましたか。
3　夜の間に、誰が出てきたのですか。
4　おじいさんは、何をプレゼントしましたか。
5　プレゼントした後、こびとたちはどうなりましたか。





春夜　雨を喜ぶ

杜甫

好雨　時節を知り
春に当たりて　乃ち発生す
風に随いて　潜かに夜に入り
物を潤して　細やかにして声無し
野径　雲　倶に黒く
江船　火　独り明らかなり
暁に紅の湿える処を看ば
花は錦官城に重からん

百人一首

わたの原
八十島かけて　漕ぎ出でぬと
人には告げよ　海人の釣舟

（参議篁）

夜もすがら
物思ふころは　明けやらで
閨のひまさへ　つれなかりけり

（俊恵法師）

春過ぎて
夏来にけらし　白妙の
衣ほすてふ　天の香具山

（持統天皇）

わが庵は
都のたつみ　しかぞ住む
世をうぢ山と　人はいふなり

（喜撰法師）

俊恵法師